



とけた「ろう」が、冷えるとかたまるのはなぜ

冷えるとすぐにかたまる

ほのおのまわりのろうは、ほのおの熱でとけますが、外がわのろうはまわりの空気に冷やされて、かたまっただままです。それで、熱でとかされた部分が少しへこみ、まわりのろうがすぐにとけないために、ちょうど土手のようになって、とけたろうをこぼさないのです。それぞれの物は、固体から液体に変わるための温度（ゆう点）がきまっております、パラフィン^{もの}は50度C、もくろう^{こたい}は45度Cです。そのため、熱に弱く、すぐにとけるろう^{えきたい}そくのろうは、空気に冷やされると、たちまちかたまってしまうのです。

ろうそくに熱を加えるととける

ろうそくは、パラフィン、みつろう、もくろうなどから作られています。明治時代に、パラフィンで作られた西洋ろうそくが日本に伝えられました。

ろうそくのろうは、そのままではもえません。ろうそくの中心にしんになる綿糸のひもが入れてあります。しんに火をつけると、その熱でろうがとけ、しんの中を伝ってしんの先へいき、気体になってはじめてもえるのです。（監修 小川 格）

